

提言

子どもたちの心に寄り添い、
よりよい未来を拓く力を育てる教科書の開発
一生の宝ものとして大切にしてくれる教科書を工夫しよう

ご所属 武庫川女子大学

武庫川女子大学 押谷由夫

魅力的な教科書がそろった

平成 29 年 3 月 24 日、文部科学省は、8 社から申請されていた「特別の教科 道徳」の教科書に対して、合格の検定結果を公表した。各社は、ホームページ等で、自社の教科書の特徴を様々にアピールしている。どの教科書も、検定の基準を考慮しつつ、魅力的なものを創り上げている。従来の副読本と比べて格段の進歩がある。

① 8 社の教科書を活用したい

学校に望むのは、採択された教科書だけではなく、他の 7 社全部の教科書を手にとっ
てほしいということである。どの教科書も道徳教育の充実にとって宝ものである。
わが国の道徳教育の大きな財産として活用することによって、多様な道徳教育が展開
されていくと確信する。

② 発展途上中の教科書

しかし、満足しているわけではない。正直に言えば、それぞれの編集の趣旨は素晴ら
しいが、その内容は、発展途上である。「特別の教科 道徳」の教科書開発にチャレン
ジ頂いた各社に敬意を表しつつ、更に充実していくための提案をしてみたい。

ここでは、学習指導要領に明記されている教材の留意事項や教科用図書検定調査審
議会の「「特別の教科 道徳」の教科書検定について（報告）」等を踏まえた上で、特
に次の 5 つの視点から述べていく。第 1 は、どのような人間を育てようとしているの
か。第 2 は、道徳学習を深める基礎力の育成に十分な配慮がなされているか。第 3 は、
子どもたちにとって魅力的な教科書になっているか。第 4 は、教師にとって魅力的な
教科書になっているか。第 5 は、保護者にとって魅力的な教科書になっているか、であ

る。

1 どのような人間を育てようとしているのか

道徳教育は、人格の基盤となる道徳性を育むものである。その要として「特別の教科 道徳」が設置されている。だとすれば、「特別の教科 道徳」の教科書には、育てようとする人間の姿が全体を通して感じ取れるようになっているはずである。

では、どのような人間像が求められているのか。ここでは、特に重要な、日本国憲法、改正教育基本法、新学習指導要領、そして「特別の教科 道徳」に分けて、そこで強調されている人間像を見てみたい。

① 日本国憲法が求める人間像

国民にとって、最も大切なものが日本国憲法である。憲法には、わが国が進むべき方向性とあるべき姿が明確に示されている。

日本国憲法の理念は、言うまでもなく、平和主義、国民主権、基本的人権の尊重である。平和主義とは、平和な国家社会が創られ世界の平和に貢献できるということである。国民主権とは、国民一人一人が尊重され、一人一人が主役となって国家社会を創っていくということである。基本的人権の尊重とは、一人一人がかけがえのない存在として尊重され、それぞれの特性を生かしながら、自由にのびのびと生きていけるようになることである。

これらは別々ではない。相互に関わり合って、日本国憲法が目指す「崇高な理想」の実現を目指すのである。「特別の教科 道徳」の教科書では、このことが、子どもたちの発達段階に応じて、発展的に感じ取れるようにしていくことが大切である。

② 改正教育基本法が求める人間像

憲法に掲げる「崇高な理想」の実現を目指して、教育基本法が制定された。その教育基本法が、平成18年に59年ぶりに改正された。そこで、改めて強調されているのが人格の形成である。第1条（教育の目的）で、日本の教育の目的は、人格の完成を目指すことを再確認すると共に、第3条（生涯学習の理念）で、より具体的に「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生が送れるよう」にすることだと記され

ている。つまり、人格の完成を目指す教育とは、国民一人一人が人格を磨き続けることを通して豊かな人生を送ることができるようにすることなのである。豊かな人生とは、幸福な人生であり、生きがいのある人生である。

「特別の教科 道徳」の教科書は、子どもたちの日々の生活を幸福な気持ちで過ごせるようにし、やりがい観、生きがい観をもって生きられるように応援していくものである必要がある。

さらに、第二条（教育の目標）には、人格の完成を目指した教育においては、徳を中核として、知と体を養っていくことが重要であることが述べられている。徳とは、道徳性である。道徳性の育成を図る道徳教育を基盤として、その具体的追究を、教科等での様々な学習や日常生活の中で培っていくことを求めているのである。

道徳教育の要となる「特別の教科 道徳」の教科書は、「特別の教科 道徳」の学習を通して各教科等の学習や日常生活の学びへとつながっていくようにすることが大切である。

③ 新学習指導要領が求める人間像

学校における教育は、教育基本法や学校教育法に基づいて行われるが、教育課程については、学校教育法施行規則において、「文部科学大臣が別に公示する小学校（中学校）学習指導要領によるものとする」（第52条、第74条）と規定されている。

新学習指導要領は、平成29年3月に告示された。そこでは、どのような人間像を求めているのか。

まず、これからの子どもたちに求められる資質・能力を「三つの柱」で述べている。第1は、「個別の知識・技能」、第2は、「思考力・判断力・表現力等」、第3は、「学びに向かう力、人間性等）」である。

第3の学びに向かう力とは、学びの目標を追い求めようとする力である。学びの目標は、人格の完成であり、幸せを求めよりよい自分と社会を創っていくことである。

資質・能力の「三つの柱」をもとに、求められる人間像を考えると、「知識・技能」をしっかり身につけると共に、それを応用して様々な課題に正対し乗り越えるための「思考力・判断力・表現力等」を養い、自らのよりよい生き方とよりよい社会を実現しようとする人間、ということになる。

これらの三つは、「特別の教科 道徳」以外の全部の各教科等の目標において、各教

科等の特質に応じて示されている。つまり、各教科等の学習が、よりよい自己の生き方やよりよい社会の創造へと向かわせるようにするということである。

「特別の教科 道徳」の教科書は、よりよい自分と社会を創るという視点から、各教科等の学びと密接にかかわれるようにしていくことが求められる。

また、そのような学びを実現するためにアクティブ・ラーニングが提唱されている。子どもたちの学ぶ姿そのものが、アクティブ・ラーニングである。3つの資質・能力を統合する形で言えば、モラル・アクティブ・ラーニングと言うことになる。

「特別の教科 道徳」の教科書は、そのようなモラル・アクティブ・ラーニングを促し、モラル・アクティブ・ラーナーを育てるものになっていることが大切である。

さらに、新学習指導要領では、「開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「チーム学校」が強調されている。「開かれた教育課程」とは、社会の変化に対応し、よりよい社会を創っていくという目標を社会と共有し、社会とつながりをもたせて教育課程を組んでいくことであるとされる。「カリキュラム・マネジメント」とは、教科等の横断的指導の工夫やPDCAを確立した取組、外部の資源を活用するなどして効果を上げていくことであるとされる。また、「チーム学校」とは、専門性に基づくチーム体制の構築や学校のマネジメント機能の強化、環境整備などを行うこととされる。

これらは、学校の教育課程編成上の工夫と捉えられるが、このことは同時にどんな子どもを育てるかの大いに関わっている。つまり、子ども自身が社会に開かれた視点から、自らの「学びの地図を」を計画し、様々な人々の協力や援助を得て追い求めていけるようにするということである。

「特別の教科 道徳」の教科書は、このような子どもたちの学びを応援していくものであることが大切である。つまり、「社会に開かれた学び」「社会的課題への正対」「様々な協力体制」を考慮した学びができるようになっているかが問われることになる。そして、そのことと関わらせて、自分の学びを記録し、自己評価、自己指導ができる道徳ノートが求められる。

④ 「特別の教科 道徳」が求める人間像

では、「特別の教科 道徳」の目標や内容、方法、評価をもとにして、どのような人間像が求められているかを探ってみたい。当然に、今まで述べた人間像と重なるが、それらをより具体化した人間像が見えてくるはずである。

まず、道徳教育の目標を見てみたい。「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」（()は中学校）となっている。

つまり、道徳教育が求める人間像は、人間としての自分自身の生き方をしっかり考え、日常生活や様々な学習活動において、主体的に追い求め、チャレンジしながら、自己を形成し、みんなと一緒にあってよりよい社会を創っていける人間、ということになる。

その道徳教育の要としての「特別の教科道徳」の目標は、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」（()は中学校）となっている。

ここで求められる人間像は、道徳教育が求める人間像を更に具体的に述べていると捉えられる。つまり、人間としての生き方と関わらせて、道徳的諸価値の理解を深め、そのことを基に自己を見つめられる人間である。そして同時に、直面する道徳的な事象や状況に正対し、道徳的諸価値の側面から多様に考え、人間としての自分の生き方を深く探りながら、具体的な行動へとつなげていける人間である。

当然のことながら、「特別の教科 道徳」の教科書は、このような人間を育成する内容になっていなければならない。例えば、人間としての生き方を道徳的価値とのかかわりで学べる教材。様々な道徳的価値の側面から自分を見つめられる教材。道徳的な事象や状況を多様な側面から捉え深めていける教材。それらをうまくミックスさせた教材。更に自己の道徳的判断力や道徳的心情、道徳の実践意欲や態度を自己評価できる教材、などが求められる。

さらに、見開きの頁を使って、学習内容の全体や、全体を通して行う多様な学習などが鳥瞰できるように工夫することも大切である。

2 道徳学習を深める基礎力の育成

「特別の教科 道徳」の授業を効果的にするためには、道徳学習を深めるための基礎力の育成が必要である。主なものとして、多様に考え抜く力、豊かに感じる力、自己を深く見つめる力、相手の立場に立って共感的に考える力、よりよく生きられるこ

とを信じる力である。それらを、「特別の教科 道徳」の教科書がどのように培えるようになっているかが問われることになる。

① 多様に考え抜く力の育成

人間として生きることを考える学問は、哲学である。哲学的学びを通して論理的に考える力もついてくる。道徳の授業は、その訓練をする時間でもある。フランスにおける道徳教育は、哲学を重視し、多様な視点から考え抜く人間の育成を重視している。

では、道徳的事象や状況に対して、どのような思考が求められるだろうか。そのスキルとして、基本的には、次のような視点移動ができることが求められる。例えば、本質から考える視点移動（**本質軸の視点移動**）。相手の立場に立って考える、第3者の立場で考える、自分の立場で考える視点移動（**対象軸の視点移動**）。過去はどうであったか、結果や将来はどうなるのかから考える視点移動（**時間軸の視点移動**）。条件や状況を変えて考える、仮説的に考える、比較して考える視点移動（**条件軸の視点移動**）である。

「特別の教科道徳」の教科書は、多様な道徳的事象や状況について考えられる教材を用意し、多様な視点移動を訓練しながら「簡単に正解の見いだせない問題や課題」に対しても、考え抜く力の育成をはかれるように考慮されていることが大切である。

例えば、巻末に付録などを設けて、さまざまな道徳的事象や状況に対して、多様に考えるためのスキルを掲載しておくことも考えられる。実際の授業においてそれらを活用できるようにするのである。

② 豊かに感じる力の育成

道徳性の育成においては、直感的な感性を育てることが重要である。そのためには様々な感覚器官を磨いていくことが大切である。

「特別の教科 道徳」の教科書においても、例えば、ネイチャーゲームで行うような「目を閉じて聞こえる音を紙に表現する」活動を取り入れて教材。音楽科の鑑賞が合唱、合奏と関連させた教材。図画工作や美術科の鑑賞や表現と関連させた教材。動物のぬくもりや感動的な自然現象などを体感しながら学べる教材。映像教材で人体や宇宙の神秘などを感動的に理解しながら進められる教材。絵や写真等を通して、人の感情を読み取ったり、不注意になることに気づいたり、様々な道徳的事象や状況に気

づいたりすることのできる教材、などの工夫が求められる。

また、登場人物の生き方や生活などが豊かに想像できる教材や、深く心に訴える感動的な教材も重要である。

③ 自己を深く見つめる力

道徳教育が求めるのは、豊かな自己形成である。そのためには、自分を深く見つめる力を育む必要がある。物事を多面的・多角的に考える力を育むのも、結局は自己を見つめる視点を広げ深めていくためと言っても過言ではない。そのことによって物事の解決を主体的に考えられるようになるからである。

道徳における自己を見つめるとは、人間らしさの根幹である道徳的価値に照らして自分を探究していくことである。自分の中にある価値意識や実際の姿を、過去の自分、現在の自分、これからの自分を探っていくことから再確認していくことになる。

「特別の教科 道徳」の教科書においては、それぞれの内容項目に示される道徳的価値から自己を見つめられるように様々な工夫がなされている。それは重要であるが、「特別の教科 道徳」の特徴は、基本的な道徳的価値全体を見通して、自己を見つめることができるところにある。

例えば、4つの視点ごとに自分をみつめたり、学期に学習した全体から自己を見つめたり、総合単元的に学んだ全体をもとにしながら自己を見つめたりする工夫がなされているかも知られることになる。

④ 相手の立場に立って共感的に考える力

道徳教育は、心の通い合いをベースとした学びである。心が通い合う基本は、相手を共感的に理解することである。つまり、相手の心に寄り添いながら、道徳的事象や状況を考える力を養うことによって、生きて働く道徳性が育つ。

「特別の教科 道徳」の教科書には、様々な人物が描かれるが、どのような人物であれ（動物などが擬人的に描かれている場合も含めて）、子どもたちが共感的に捉えられるような状況やエピソードなどが描かれていることが大切である。

何に共感するのかというと、その人の生き方や人生、悩みや苦しみ、喜びや楽しさ。生い立ちや置かれている状況、抱えている課題、等についてである。弱さやもろさ、悲しみや苦しみへの共感と同時に、よりよく生きようとする心や希望を見いだすこと

への共感を合わせて持てるようにすることが重要である。

⑤ よりよく生きられることを信じる力

道徳学習を進めていくには、よくなりたいたいという意志力とよくなることを信じて継続的に取り組んでいく力が必要である。その根本は、自分の成長を信じる力である。夢を語り合い、未来に希望が持てたことを実感し語り合うことが重要である。

「特別の教科道徳」の教科書においては、子どもたちを勇気づけていく教材や、どのような状況でもこつこつと努力すれば必ずよくなっていくことを確信できる教材が求められる。

さらに、明るく未来を拓いていくための課題を見いだしていけるような教材や、自らの目標を明確にし、そのために何をしなければならないかについて、当面の目標、近い将来の目標、遠い将来の目標などに分けて、具体的に取り組む、定期的に自己点検し、学び続けられる教材（道徳ノートの工夫も含めて）が求められる。

3 子どもたちにとって魅力的な教科書になっているか

以上にあげたことは、子どもたちにとって魅力的な教科書にしていくためのポイントでもある。そのことを踏まえた上で、ここでは、子どもたちにとって、いつも持っていたくなるような、かついつも使いたくなるような教科書になっているかという視点から考えてみたい。

まず、「見た目」である。子どもたちが感覚的に、おもしろそうだな、もっと見てみたいと思える教科書になっているか、である。表紙や全体的な誌面構成、写真や挿絵、場面の描き方などが、子どもたちの興味を引き、想像をかき立てるようなものになっていることが求められる。

また、全体の案内役や対話の対象になるようなキャラクターを設定して、子どもたちと同じ目線に立って教科書を活用していけるように工夫することも考えられる。

さらに、子どもたちが、予習をしたり復習をしたり、発展的に調べたり、取り組んだりできるような道案内がなされているかも重要である。いわゆる学習の仕方についての押さえがなされているか（オリエンテーションも含めて）である。そのことを、

具体的な教材をもとにして示したり、付録で示したりすることもできる。それらを具体的に組み組んだ授業の様子などが記録できる道徳ノートの工夫も求められる。

なお、落ち込んだときに立ち直る方法や、集中できないときに集中する方法など、日常的に活用できるヒントなども教科書に掲載したい。

4 教師にとって魅力的な教科書になっているか

教師の願いからすれば、まず、「特別の教科道徳」の教科書は、全体を通して、子どもの心に寄り添いながら子どもたちへの愛情を感じ取れるようなものであってほしいと願うはずである。

また、教師は、道徳の授業の進め方と同時に、学校や家庭などでの日常的な生活や各教科等での学びとどのようにつなげていくのかについて悩んでいることが多い。教科書だけではなく、道徳ノートや指導書などにおいて、考慮してほしいと願う。特に重点的に指導する内容については、連続的、発展的な学びが子どもと共に進められるような工夫がなされていたり、各教科等の学習においても活用できるような編集がなされているといっそう有効に活用できる。

さらに、これからの教育を考えれば、デジタル教科書やタブレットを取り入れての学習などへと発展できるような考慮がなされていることも重要である。

5 保護者にとって魅力的な教科書になっているか

保護者は、我が子がどのような道徳の勉強しているのかがよく分かり、かつ子どもたちの心の状態が深く感じ取れる教科書ならば、読んでみたいと思うはずである。そして自分にとっても、参考になるなと思えると、一緒に学んでみようとする気持ちが起こる。また、地域のことについて書かれてある教科書は、より魅力的である。補助教材として地域教材や学校独自の教材も学校で用意することも考えたい。

「特別の教科 道徳」の教科書は、教師と子ども、保護者の3者が共通教材としてかかわっていけるものである必要がある。そのための編集の工夫が求められる。